



[令和 2 年 9 月 9 日 定例会発表要旨]

手稲鉱山を拓いた人々 ～その光と影～

手稲郷土史研究会 会員 鈴木清士

手稲郷土史研究会では、10年前の平成22年に『手稲鉱山のあらし』を刊行したが、紙面の関係で書ききれなかった部分や研究不足なところが残っていた。今回はその中の金鉱発見から本格的開発に至るまでの途を切り拓いた3名の先人にスポットを当て、その人物像の光と影を究めてみたいと思う。



① 明治期…鳥谷部弥平治 [天保5(1834)年～明治42(1909)年]

鳥谷部弥平治は盛岡藩五戸（現青森県三戸郡五戸町）出身。

生まれ育った五戸は、奥州街道の宿場町として栄え、代官所が置かれていた。鳥谷部家の先祖はこの代官所の役人として代々仕え、暴れ川の五戸川を改良して、蝦川地区に新田を開墾した功績の記録が残されている。鳥谷部家は分家を重ねて明治維新時、五戸には17の鳥谷部家があったと言われ、そのうち「とやべ」姓を名乗る家と「とりやべ」姓を名乗る家とに分かれている。また、県議、町長、学者、財界人などの有能な人材を輩出しており、この地方では名門といわれている。

鳥谷部弥平治の渡道前の五戸での生活については定かでないが、古老の話によると農業の傍ら鉱山師を生業としていたらしく、星置に単身入ったのも、金鉱探しの一人であったことは否定できない。

鳥谷部は、手稲鉱山の金鉱第一試掘申請者として明治26年頃から採掘を始めるが、有望な金脈発見に至らず、晩年、鉱業権を放棄している。弥平治の孫にあたる方の話によると、鉱業権所有にかかる税金が払えなくなったため、止む無く手放したとのこと。妻子を五戸から呼び寄せたのは明治29年で、やがて農業に専念するようになり、今は第二のふるさとで安らかに眠っている。



鳥谷部夫妻の墓
(小樽市星野町)

—三國勲会員 提供写真—



② 大正期…石川貞治 [元治元(1864)年～昭和7(1932)年]

石川貞治は石見国浜田藩浜田（現島根県浜田市）にて、浜田藩士の四男として出生。浜田は、もとは長州藩の領地であったが、関ヶ原の戦いで敗れて減封、その後長州藩の抑えとして浜田藩を立藩。浜田藩が第二次長州征伐で敗戦となり、藩主松

平武聰は、城を焼いて備中津山藩（後に岡山県）美作にある浜田藩の飛び地に避難し、陣屋を築いて作州鶴田藩（6万1千石）を創設した。

これに伴って石川家も美作鶴田に移住したが、その後貞治が札幌農学校に入るまでの少年期については不明である。

明治17年に札幌農学校入学、同校卒業後は北海道庁技師、兼務で札幌農学校嘱託助教授を務め、明治29年には拓殖務省技師として台湾に赴任。その後、実業界に転じ、貿易会社、鉱山会社、北海英語学校（後の北海中学校、現北海高校）の創設などにも関わっている。

大正5年、石川貞治は鉱業権を得て「手稲鉱山」と命名し、黄金沢抗大豊鍾付近で開発を始めた。

一時相当の成績をあげたが、新たな鉱脈探しに失敗して資金難に陥り、閉山やむなきに至っている。

石川貞治は、非常に優秀な方だったようだ。しかし、その非凡な才気を学者、官僚、実業家として活かすきれなかった不運なところがあったのではないかと思われる。北大の同窓会誌に、「誠に時流に一步先だったアンビシャスな一生であったが、酬いられることは豊かでなかった」との評が寄せられている。



石川が在籍した明治 20 年頃の札幌農学校
— 北大附属図書館所蔵写真より —



③ 昭和戦前期…^{ひろせしんさぶろう}廣瀬省三郎 [明治 10 (1877) 年～昭和 35 (1960) 年]

廣瀬省三郎は、長野県高遠町（現伊那市）で、酒造業を営む廣瀬利平の次男として出生。伊那地方は太平洋プレートの沈み込みにより出来た日本アルプスの峰々に囲まれた盆地で、付近の山には海底から隆起した様々な岩石が見られ、少年時代の省三郎は、この鉱石の標本づくりに熱中したという。これが、鉱山人としての途へと歩むきっかけとなったのではないか。

廣瀬家のルーツは、木曾義仲に仕え、義仲滅亡後は信州 武田家、徳川の世では井伊直政へと変転している（廣瀬家の系譜より）。

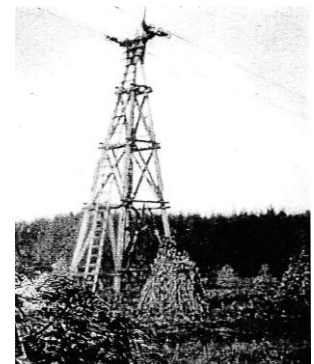
省三郎の経歴を辿ると、明治 27 年に東京錦城中学入学後、築地淀橋工手学校へ転校・卒業。明治 31 年に古河鉱業へ入社し、秋田県北秋田の阿仁鉱山（銅山）に勤務。北海道古平の稲倉石鉱山、三笠の幌内炭鉱 測量主任などを経て、明治 38 年、省三郎 28 歳のとき、岐阜県垂井町の谷治恵 25 歳と結婚。明治 39 年、田中鉱業入社。ボーリング技師として青森県川内の安部城鉱山などで勤務する。大正 11 年、大倉鉱業へ。北海道赤平の茂尻炭鉱など歴任する。

昭和 3 年、手稲鉱山の鉱業権を取得し、探鉱と採掘を始める。選鉱場や鉱石運搬用のケーブルを建設するなど事業を拡大していったが、資金難のため、万能沢坑を残し主要坑を藤田鉱業に委託。昭和 10 年、鉱山を三菱鉱業に 200 万円（現在換算 50 億円）で売却。昭和 12 年に東京都調布仙川へ移住。昭和 16 年には伊豆半島の修善寺付近にある金鉱山の開発に着手するも、金山整備令が追い打ちをかけ失敗、損失を被る。

昭和 19 年、鉱業界から引退。熱海伊豆山の別荘 閑雲亭に転居する。昭和 35 年、閑雲亭にて没、85 歳だった。葬儀にはその人徳を偲び、故郷の高遠町長はじめ大勢が参列したという。

廣瀬は、鉱山人として活躍する傍ら、風流人、文化人としても知られた。若いころから「奇壁」の号で俳句をたしなみ、その句は、五七五の定型にこだわらない自由律で、新傾向の俳人であった。晩年、多くの句碑を残し、出身地の高遠には 土地や建物等の寄進も行っている。また、廣瀬の妻 治恵も 昭和 9 年、中島公園に隣接する札幌護国神社へ大鳥居を献納している。これは国内でも十指に入るといふ立派な大鳥居である。

廣瀬省三郎の夢は、鉱山の開発だった。幼少のころから鉱石の標本を集め、中学校も普通中学校から鉱山学科のある工手学校に転校した。鉱山会社に就職して東北や北海道の鉱山を廻って修練し、手稲鉱山の開発で成功を収めたが、伊豆の金山開発に失敗し、損害を受けた — 戦後は、貨幣価値の暴落により 清貧の生活となったが、俳句や信仰に傾注し、夢を叶えた人生ではなかったろうか。



廣瀬が建設した鉱石運搬用
ケーブル支柱のうちの 1 本
— 三國勲会員 提供写真 —

次回定例会 ⇒ 発表内容「明治期における『新川』事情」／榎本洋介氏（札幌市公文書館）

11 月 11 日（水）13:30～／手稲区民センター 3 階 視聴覚室／会員でない方の聴講は申し込みが必要

●REPORT-1 視察研修ツアー「当別～アイヌ語と触れ合う旅」

9月25日（金）、手稲郷土史研究会恒例の『視察研修ツアー』が行われ、30名が参加しました。今年度の研修先は当別町と開設30周年を迎えた『道民の森』。マスク着用・手指消毒と、新型コロナウイルス感染症への予防を講じながら、バスは午前9時に手稲区民センターを出発。当別町と交流のあるスウェーデンの雰囲気を取り入れたという『北欧の風～道の駅とうべつ』に立ち寄ったのち、最初の目的地『伊達邸別館』と『当別伊達記念館』を目指しました。

当別町は、独眼竜 伊達政宗の四男を家祖とする名門 岩出山領 伊達家の家臣団により拓かれた町で、150年余の歴史があります。『伊達邸別館』は、明治13年に建造された伊達家10代当主 邦直公の邸宅であり、貴賓客の接待所でした。『当別伊達記念館』では、当別歴史ボランティアの会の方の詳しい案内で、戊辰戦争の終焉や伊達家主従の入植に関する資料などを見学し、往時を偲びました。邦直公ゆかりの『当別神社』は、もとは『阿蘇神社』と呼ばれていたそうで、阿蘇はアイヌ語のアソイワ（柴木の多い山）が語源といえます。なお 土族による当別町の開拓の歴史は、本庄睦男の小説『石狩川』にも克明に描かれています。

「田西会館」で昼食の天井をいただいた後、一行は『道民の森』を目指すべく「ふくろう街道」（道道28号）を北上しました。今回のツアーの隠れたテーマは「アイヌ語と触れ合う旅」です。アイヌ語に因む山や川、地名の説明を聞きながら進むと、二宮尊徳像が見つめる木造二階建ての「旧弁華別小学校」（昭和12年建造）が現れました。明治25年に当別尋常小学校第一分教場として開校し、平成28年3月の閉校時は北海道で現役最古の校舎でした。弁華別は、アイヌ語のペンケ チュベシナイ（沢と川のある樹木が繁っているところ）に由来し、樺戸集治監の設置に関わった月形潔が、郷里の福岡県に開拓の適地と伝えたことで開拓団が入植したとされます。

バスはさらに当別川を遡ります。最新技術を用いて平成24年に完成した『当別ダム』の広大なダム湖（通称：当別ふくろう湖）と周辺の豊かな自然環境を眺めながら、昭和37年完成の『青山ダム』も車窓から見学。農業用水確保のために建設された『青山ダム』は、『当別ダム』ができた現在はその役割を終えて、湖底には水がありませんでした。



「道民の森」神居尻地区にて記念撮影

いよいよ『道民の森』^{カムイシリ}神居尻地区に到着。カムイシリは神々が住む山の意。道民の森ボランティア協会の方々の案内で、約50分間の自然林散策コースを巡ります。ミズナラの巨樹、変化に富む木々のすがた、はてはタヌキの糞まで…。疲労を感じつつも大自然の恵みを満喫しました。

帰路は、アイヌ語の地名研究の第一人者である当会の渡辺隆 会員を講師に「山を表すアイヌ語」を学びながら、午後4時40分、手稲区民センターへ無事帰着。皆さん、お疲れ様でした。 佐々木光男（手稲郷土史研究会 会員）



当別伊達記念館(左)と伊達邸別館(右)



開拓の顕彰碑などが並ぶ当別神社



立派な学校建築～旧弁華別小学校



車窓より当別ダムを望む



「道民の森」青山案内所付近に立つ看板

【どろ亀さん】 9月25日に行われた 手稲郷土史研究会の研修ツアーで立ち寄った『道民の森』青山案内所の道路脇に、写真のような看板がありました。「どろ亀さん記念・当別 22 世紀の森」と書かれた上段に“アダプトプログラム”の文字が見えます。これは、道路・河川などの公共施設を 地域住民、愛護団体、NPO 法人、企業等が行う清掃活動などにより、美しい生活環境

を創り出す制度のことです。空知総合振興局と石狩振興局管内の道路・河川等の整備・管理にあたる北海道札幌建設管理部では 2003（平成 15）年からこの制度を実施しています。「どろ亀さん記念」は、その第 1 号の事業でした。

“どろ亀さん”とは、東京大学名誉教授（森林学）の故高橋延清（1914/大正 13 年頃生～2002/平成 14 年没）の愛称です。高橋延清は、1938（昭和 13）年に東京帝国大学農学部「北海道演習林」助手として着任。助教授、教授を経る中、演習林での研究と教育に従事するかたわら、北海道林業発展のため、緑化、自然保護、林業問題に関する指導的な役割を果たしました。いつも泥にまみれて歩くその姿から“どろ亀さん”と呼ばれ、多くの人々に慕われていました。

【ダム】 今回のツアーは、当別川流域に設けられている『当別ダム』と『青山ダム』を車窓から眺めながら進んでいきました。

『青山ダム』は、下流の田畑に水を供給する灌漑用水用ダムであり、1962（昭和 37）年に竣工した“アースダム”です。『当別ダム』は、灌漑用水、水道用水、洪水調節、河川環境保全（川の流量の安定、水質悪化防止、生態系などの河川環境保全）を目的とした多目的ダムであり、2012（平成 24）年に竣工した“CSG（Cemented Sand and Gravel）ダム”です。なお、『青山ダム』は下流に灌漑用を兼ねた大きな『当別ダム』ができたため、現在は使われていません。

ダムは、“コンクリートダム”と土や岩石を盛った台形状の“フィルタイプダム”に大別されます。さらに、“コンクリートダム”は“重力式ダム”（例：定山溪ダム）と“アーチダム”（例：豊平峡ダム）に、また“フィルタイプダム”は“アースダム”（土を盛ったダム）と“ロックフィルダム”（岩石、玉石を盛ったダム）、“CSG ダム”（ダム周辺の砂や礫を材料にしてセメントで固めたものを盛ったダム）に区分されます。一般に、支持地盤がしっかりした固い岩石の場合に“コンクリートダム”が使われ、支持地盤が柔らかい場合に“フィルタイプダム”が用いられます。『青山ダム』や『当別ダム』は支持地盤が比較的柔らかい新第三紀の堆積岩であるため、“フィルタイプダム”が採用されました。

【鳥の巣】 『道民の森』神居尻地区の散策は、コロナ禍で家にこもっていた私たちにとって久しぶりに新鮮な空気を吸う良い機会でした。散策路では 樹齢 500 年、高さ 32m のミズナラの巨木を眺めたり、タヌキの糞らしきものや エゾリスが飛び回るのを目にするなど、自然を満喫しました。

偶然、散策路の脇に落ちていた小さな鳥の巣を拾いました。その巣は外径 10cm 土、高さ 4cm のもので、外側が荒く、内側が細かな樹皮を編み込んだ精巧なものです。何の鳥の巣なのでしょう。



若松幹男（手稲郷土史研究会 会員）

「道民の森」で拾った鳥の巣